

研究開発課題別中間評価結果

1. 研究開発課題名

高齢者の記憶と認知機能低下に対する生活支援ロボットシステムの開発

2. プロジェクトマネージャー

井上 剛伸（国立障害者リハビリテーションセンター研究所 部長）

3. 課題の概要

認知機能の低下した高齢者を対象として、生活に必要な情報を伝えることにより、適切な生活行動を促し、自立・自律した生活の維持促進を目的とした実用可能な情報支援ロボットシステムの開発を行う。さらに、利用者個々に対応する導入サービスや供給体制を含めた、トータルな高齢者支援産業の創出を目指す。

4. 評価結果

（1）研究開発の進捗状況と成果の現状

フィールドを重視し当事者とスタッフの視点に基づいて、高齢者の認知機能レベルに適応した個別情報伝達手法の決定を行うなど、真に必要な場面を明確化する努力が見られる。しかし、認知症高齢者の長期モニタリング評価の実施人数が少ないこと、生活支援対象者のどのセグメントに使用可能なのかが明確化されていないなどの点で、当初目標からは遠いと言わざるを得ない。

（2）今後の研究開発に向けて

現在、高齢者向けに提供されているサービスは、安否確認や見守りが主体となっており、本課題で取り組む「当事者への情報提示により日常生活を支援する」という開発方針と合致しており、社会的要請に応えるものである。今後は高齢者のどの対象群に有用であるかを明確にした上で、実用化に向けた仕様を絞り込む必要がある。さらに、実験例の少なさを補い、使用者に慣れや飽きを生じさせなくするための適応方法・介入方法についても検討が必要である。また、トータルサービスを提供するための他の技術・組織との連携の方法等についても明確にする必要がある。全体としてグループごとに独立して研究に取り組んでいる印象があり、メンバー全員による情報共有とプロジェクトマネージャーによる課題解決のためのマネジメントが望まれる。

（3）総合評価

次ステージでは、高齢者の特性に関する分析と分類について、科学的手法を導入して早急に明確化する必要がある。さらに、社会実装する上で必要となる利用場面の掘り下げと、それに対する本研究開発での取り組みの有用性を示す必要がある。また、服薬やスケジュール管理、体操などの運動支援など、従来、高齢者向けロボットサービスで検討されてきたものと比較した際に、具体的にどの部分が優位かを示すことも求められる。上述の通り、研究開発計画と研究開発体制の見直しが望まれる。以上の結果から、総合評価を B とする。